

---

# デュラララ！？

ゆっけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デユラララ！？

### 【Nコード】

N0607M

### 【作者名】

ゆっけ

### 【あらすじ】

デユラララにオリ主ぶっこんだ

## Prologue

自販機が路上を飛ぶ。

そんな非常識な光景は、この池袋では日常である。 というより一週間に一度は目撃しているから、日常茶飯事と言ったほうが的確だろう。

自販機をぶん投げた男の名前は平和島 静雄。

自販機を投擲されたのが、日野 公平。

「手前と臨也は池袋の地を踏むなってえええ、いったろおがああああああ！！！！！」

憤怒の形相でこちらを睨むその姿は、まさに鬼。

なら逃げるだけだろう？

「おいおい、俺はこの年で鬼ごっこなんかしたかねえんだがよ」

「タッチじゃあああ、すまねえぞおおおおおお！！！！！！」

静雄が手にするのは、ガードレール。 国民の税金で作られたそれは、安全のためではなく、人に死を与えかねない凶器として振るわれる。

ああ、なんて皮肉なのだろう。 振りかぶる金棒は日を浴びてやけに光る。 かの有名なエクスカリパーだってシズシズが使えば9999になるよね。 ガードレールならオーバーキルな気がする

んだけど。

通行人達は驚き、二人を良く知る外人はにこやかに笑いながら、客引きを続ける。もしこれが臨也という青年と静雄だったら、外人、サイモンは全力で止めにはいるだろう。何故なら一般人にも被害が出るから。だが、公平という男はそういった攻撃はしないし、静雄の一撃を人のいる場所で振るわせるようなこともしない。

『そろそろ止めねえと、客がよりつかなくなっちまうか』

サイモンはロシア系黒人であり、この近くにある露西亞寿司の店の店員だ。店の売り上げが、本日ゼロになることは避けたい。ようやく動きだした巨体の黒人は、静雄が繰り出した、右のストリートを手で止める。

「おいおい、サイモン。出てくるのが遅いんじゃないの？」

信頼してたのに、という公平の言葉ににこやかに微笑みながらサイモンは、横槍にぶち切れた静雄の蹴りを身体を半身にすることで回避する。

「喧嘩ヨクナリーネ、オナカがスクデショー。ダカラ露西亞寿司タベルネ、安心価格の時価ネ」

「じゃまあああすんならああ、ぶん殴んぞおおおお!!！」

「いや、もうぶん殴ってるんだけど。 あれ、もしかしてギャグ？ あはははははははははは……、つまらないんだけどシズシズ？」

殺す殺す殺す殺す殺す、連呼しはじめた静雄を尻目に公平は、サイモンの傍に近寄る。

「まあ、あれだ。 罪滅ぼしとして露西亞寿司で一番高いやつ今から頼みにいくから、それでチャラっつーことで」

頼むな、と去っていく男の背中を苦笑いで見つめ、視線を真後ろに戻す。

「イライラ、体にトツテモヨクナイヨー」

サイモンが軽症で寿司屋に帰ってこれるまで、あと、一時間。

「あれえ、カドカドじゃない。 久しぶりだね？」

「あはははは、俺の事は無視なんだ。 別にそれはいいんだけどさ、一円玉を俺の顔面にぶつける理由が分からないよ」

引き攣った頬で門田という男はため息を吐く。

「なんだ、日野か。 アジアのどっかで行方不明になったって、噂で聞いたんだが、生きてたんだな」

門田はあきれた表情で、いったい何十枚と持っているのか、延々と笑顔だが米神に青い筋を浮かべる、折原 臨也に向けて一円玉を親指で弾き飛ばす男を見た。

「いや、タイに行ったら暴動に巻き込まれてさ。 帰れなくて、イラついてたところにマフィアが喧嘩売ってきて、ね」

「なにが『ね』なんだ……」

とうとう堪忍袋の緒が切れたのか、臨也も額に打ち据えられて落ちた一円玉を、公平と同じ要領で飛ばしあう。 が、至近距離で飛ばしあっているというのに、公平には一切当たらない。 顔を絶妙な位置にずらし、避け続けているその姿は、サーカスにでも出てきそうな超人と重なる。

「いい加減にしろよ」

座敷の入り口に特上寿司の握りを持ってきた店主は、彼もまたサイモンと同じロシア人であり、サイモンと同じぐらいの強さである。そして切れたら……。

釈迦だって切れれば、相手を石の下に相手を何百年も放置プレイするのだ。 ここはお互い引くべき。 君が売ってきたんだから、そっちが止めれば？

アイコンタクトで会話する二人だが、そこまで通じ合っているの

に、一向に弾く指を止めない。

店主がゆつくりと背中から刺身包丁を取り出したその時、止めに入ったのは門田だった。

「あ、そういえば最近ダラーズっていうカラーギャングの話がよく出るんだが、知ってるか？」

子供でも分かる空気を変えるための言い方だが、それに反抗するほど二人は餓鬼ではないし、変えずにいる理由もない。というより終着点が分からなかったので幸いと、話に乗った。

「なんだよ、その外貨みたいな名前？」

「サークルみたいなカラーギャング。ルールもリーダーもない。メンバーも何人いるのか、どんな年齢層がいるのかも不明」

門田は携帯を取り出し、慣れた風に画面を二人に見せる。

「ふうん、この登録画面に名前を入れたらダラーズですってか。新手の宗教団体みてえだな。それでカドカドも入ってるわけか」

門田の手から携帯を奪い、赤外線機能を開き、自らの携帯に送る。

「あれれ、群れるのは嫌いだと言ってたのに？ アジアで成長したのかな」

「黙れよ、中ボス」

ダラーズにとって、日野公平がどういった波紋を呼ぶのかは、分

からない。

ただ、この瞬間、決まっていたはずの少年少女達の運命が、変わっていくことだけは確かだった。



## **P r o l o g u e (後書き)**

短編で投稿してしまったOTL

## 序章（前書き）

長く書こうとした。 したんだが、これ以上プロットから考える話が出来なかったという。 まあどうでもいい話を書こうと思えばできたんですが、登場人物は序盤に増やしすぎると後悔するので、トムさんだけにしましたとさ。

## 序章

俺が体験したことを言葉にするなら、転生って言うのかな？

日野 公平にはいわゆる前世の記憶があつた。が、それは西暦で言えば同じ二十一世紀で、同じ地球だ。転生というのか、憑依などといえは良いのか、彼には分かつていなかった。なにせ彼はデュラララ！！なんてものは知らないのだ。これが、現実 異世界などという、二次創作の世界ではありふれたことなど。

ただ、同一世界ではないことは、理解していた。池袋のヤクザまがいのことをしていた時期があつたが、その時に平和島 静雄という化物なんか聞いたことも見たこともない。

こんな能力がある人間なんて、いなかっただろうしな

公平は静雄のような馬鹿力も、臨也の頭脳もない。ただ、『異常』なまでに反射神経と動体視力が良いだけだ。高校生になるまで、異常の力で喧嘩で負けたことなどなかった。避けて、相手の急所を殴るなり蹴るなりすればいいのだ。簡単すぎる。

調子に乗った公平は池袋のカラーギャングを一人で潰してまわり、恐れられ、畏敬された。気持ちよくて仕方がない。過去の自分はうだつの上がらないただのパシリ。その違いが、彼をさらに助長させる。自分は最強であると。

これが、過去の世界であつたならば、公平は確かに最強だったかもしれない。暴れまわる公平を疎んだヤクザが、拳銃で始末しよ

うとしたが、その弾丸でさえも、避けられる異常。だがそれは高校入学までのこと。

例えるなら、アリとライオン。鷹と戦闘機。誰もが公平と目を合わさず、小さい器に広がる水を心地よく思っていた矢先に現れた金髪頭。

自分を恐れずにやる気のない顔で、通りすぎる。日常のありふれた光景、だが許せない、最強たる自分にその態度はなんなのか？俺を知らないのか、なら教えてやる。

そう思っただけでガンをつけた瞬間、彼は飛んだ。廊下の1-Aという文字が、1-Cという文字に変わるまで、飛びつづける。背中から着地した瞬間、更に1-Dまで滑る。

異常で自分がどうされたのか、理解できた。ただアッパーを腹に当てられただけ。それだけのことで、彼は鳥になる。

「俺のこと睨みやがったなこの野郎？ つーことはよお、殺されても文句ねえよなあ？」

ただ睨んだだけで、何故殺されなければならないのか、公平にはさっぱり理解できない。そう、俺はただガンつけただけなのに

さっきまで気に食わないから、そういう理由で金髪頭をぶん殴ってやろうと、人のことは言えないことを思う。だが、ここで確かなことは、それは強者の考えであったということ。弱者は誰なのか、はつきりしていた。

「高校で喧嘩なんかしたくなかったんだよ、俺。なのにテメエの

せいでよ。 殺殺殺殺殺殺

」

狂ってやがる

それが彼の平和島 静雄との初めて会った日。 最後の思考であ  
った

「そっぴゃ、お前って来神高校出身なんだってな」

ドレットヘアの妙な男が、静雄に缶コーヒーを投げ渡す。

「はい。 んでそれがどうかしたんすか？」

来神高校、その単語を聞いて嫌な人物でも思い出したのか、静雄  
は眉間に皺を寄せる。

「日野 公平って野郎しってるか？」

「ええ、臨也のクソ野郎とつるんでましたから、よく喧嘩になりましたよ」

臨也と聞いてドレットヘアの男、トムは一瞬、静雄がブチ切れないか様子を伺ったが、普段と変わらない顔でコーヒーを飲む静雄

に安堵した。

「その日野って奴、昨日俺に挨拶に来てよ。アホが世話になってますって、缶ビール一箱置いて帰ったんだが、やっぱり来神のアイツか」

「アホつつつたんですか……」

やべえ、一言そう洩らした瞬間にトムは、既に二十五メートル先にあるファミレスへと駆け抜ける。

「ああ、久々に怒らしちゃった。しばらく放置だな。しかし闇討ち屋、最強の男、黒幕。心からアイツらと同級生に生まれなかったことを神に感謝しねえとな」

六年前、池袋の最強は誰か、その話が出れば即座に三人の男の名前が挙がった。もっとも二人の男は迷わず一人を指すだろうが。ギャングは勿論、ヤクザでさえ手が出せなかった男達。

時代の流れはそのビッグネームを一人残して、かき消してしまった。そしてまた舞台の端っこから、主役達の影で登場する彼らが、物語を少しずつ書き換えていくなど誰も知らない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0607m/>

---

デュラララ！？

2010年10月9日00時05分発行